薬物との決別 自らの手で

福島「磐梯ダルク」の取り組み

共同生活で支え合い

ミーティング通し忍耐力

シンナー、覚せい剤、マリファナ…。いわゆる薬物。いずれも「一度くらい」のはずが習慣化して、薬物依存症になる人が少なくない。たいがいの人は「自分には無縁だ」と思っているだろうが、女子高生が覚せい剤使用で逮捕されるなど、県内でも生活の中にじわじわと入り込んでいる。薬物依存症とどう向き合えばいいのかを、専門医のインタビューと、依存症者が回復を目指して共同生活している磐梯ダルク（福島県）の取り組みを通じて考えてみたい。（学芸部・高内小百合）

薬物依存症になりたくてなる人はいない。そこからの回復、社会復帰を目指すとき、大きな力になっているのが全国二十四カ所の「ダルク」だ。

ダルクは薬物依存者が共同生活する施設。薬物依存症からの回復者自身が、施設の運営、管理責任者を務めているのが大きな特徴だ。ダルクの入居者と責任者らが一緒になって開くミーティングに参加するのが、最も重要な日課となっている。

福島県北塩原村にある「磐梯ダルク」には、十八歳から六十歳まで三十七人が生活している。その中には本県出身者もいる。施設長、岩井喜代仁さん（53）は覚せい剤の常習者だった。

◆闘いの毎日

岩井さんは「『ダメ、ゼッタイ』キャンペーンをいくらやっても、法律で取り締まって刑罰を与えても、薬物依存症はなくならない。それより、回復者自身が薬物使用者がやめたいと思ったとき、きちんとケアする場があることが重要」と声を大にする。

ダルクの入居者にずれ、岩井さんのような回復者が目の前にいること、同じ立場で話をする。毎日テーマを決め、それについて一人ずつ思ったことを話し、ほかの人はそれをただ聞くだけ。批判、意見などを言い合わないのがルールだ。訪問した日のテーマは「クスリへの欲求」だった。

「十六歳から覚せい剤にとりつかれて二十年使った。ここへきて、やめようとがむしゃらに頑張ってきて、反動で二回、使ってしまった。『ヤク中』はあってちゃいけないんだね」「必ず光のあるところに出られると信じて、クスリの欲求と死ぬまで闘って、今日一日を生きていく」。飾らない発言が続く。

このミーティングは薬物の長期使用の影響で、低下した忍耐力などを取り戻すのにも効果的。人の話を聞きながら、自分自身を冷静に振り返ることもできるという。

「死ぬより苦しいかも」というほどの思いをして薬物依存症から回復した人々に、再出発のチャンスを提供できる社会であるかどうか、鋭い問いが逆に社会全体に突きつけられている。

◆昼夜が逆転

「薬物依存者は昼夜逆転していることが多い。ここへ来て共同生活するうちに生活のリズムが次第に整う。自炊も回復のための有効な手段」と、磐梯ダルクの運営責任者の林潤さん（33）は言う。

覚せい剤使用者だった林さんもダルクで薬物を断ち切った一人。「クスリの快楽を味わってしまったら生涯、クスリへの欲求はあり続ける。それが薬物依存症の特徴。でもクスリを使わずに生活を続けることは可能だ」と、林さんら回復者は身をもって示す。

問題は回復者のその後だ。「周囲は『ヤク中』の人というレッテルを張って見がち。回復者本人も自分はやっぱりと、どこかで弱気や卑屈にもなりがち。回復者が生きがい、やりがいを持てるよう社会全体でバックアップしていくことも大切」と林さんは言う。

午前中のミーティングの後は掃除をして自由時間に。この間に昼食を整える。磐梯ダルクでは入所者が当番制で自炊しているのも特徴だ。

15日にフォーラム

千貴さんの講演をはじめ、薬物依存症者の体験発表、家族の体験談、回復を目指す人が共同生活している「磐梯ダルク」の施設長、岩井喜代仁さんの講演などを盛り込んだ「薬物問題フォーラムイン新潟」が十五日午前十時―午後三時まで、新潟市川岸町一の県土地改良会館で開かれる。

入場無料。問い合わせは同フォーラムを主催する磐梯ダルク、0241（33）2111。

◇おことわり トレンド特集トゥデーは休みました

正直に自分の体験や思いを話すミーティング。「駄目な自分」をさらけ出すことが回復への第一歩

昼食をつくる磐梯ダルクの入居者。ダルクでの生活全体が回復へのプログラム

話題クリック

大切なのは早期発見・治療

大潟町・厚潟病院 千貴医師に聞く

使用1年、回復に3年

シンナーも軽視できず

薬物依存症者は全国に百万人とも二百万人ともいわれている。そもそも薬物依存症とは何なのか、どのような対応が必要なのか、中頸大潟町にある国立療養所厚潟病院の精神科医、千貴悟さんらに聞いた。

千貴さんは、千葉県の国立下総療養所で、二〇〇一年三月まで薬物依存症者を多く担当してきた専門医だ。

薬物依存症について、「覚せい剤やシンナーなど特定の薬物によって得られる快効果を期待して反復使用することにより、使用者自身が薬物に支配されたかのような状態になり、薬物摂取がまるで生活の目的と化してしまうような病気」と説明。重度になれば、幻覚、幻聴など精神科特有の症状も現れ、社会生活を営むのも困難になる。

千貴 悟医師

「依存は、お金や買い物などによる物理的依存、異性への依存、アルコール依存などさまざまある。それが家庭・社会生活を送る上で支障となるような度合いでなければ問題化しないが、薬物の場合は深刻な状況を招くことが多い」と言う。

「薬物使用の初期の段階、いわゆる薬物乱用レベルで治療を始めれば、薬物を断ち切ることも比較的容易」だが、依存症にまで進んだ場合は治療も長期に及ぶ。「回復には薬物使用期間の倍以上かかる。使用期間一年なら三年くらいは薬物なしの期間が継続できないと、回復したとは言い難い」

それだけに、大切なのは薬物乱用者の早期発見、早期治療だ。「薬物依存症者もその家族も、ギリギリまで我慢して、悪化させている。保健所、警察、医療などの連携で、最適の専門施設に早くつなげることが重要だ」と、社会全体で解決に取り組む重要性を強調する。

薬物の中で一般には軽視されがちなシンナーにも注意を促す。シンナーは中枢神経系に悪影響をもたらし、使用の低年齢化、長期化は人間としての発達を阻害しやすい。

「より強い刺激を求めてシンナーから覚せい剤に移行することも多く、たかがシンナーと思ってはいけない」と、多くの症例から指摘する。

「海外では薬物依存症者専用の治療施設も多く、立ち直って社会復帰するチャンスもつかみやすい。日本でも薬物依存をタブー視する意識が薄まれば、回復への道つけもしやすくなるのでは」と、社会全体で解決に取り組む重要性を強調する。

私も一言

新潟日報二月十七日付「名前呼び方」とつぶやき診察室へと戻られ、以来一〇連載「あ○さん」と名前で呼ばれるようになったのである。年齢より老けて見られていた私だけに不快感を覚え、私もかつて苦々しい思いをしたことが思い浮かんだ。五十七歳のとき地域のある病院で通院治療を受けていた際のことである。担当の看護婦さんはとても親切な人で喜んでいた。が、ある日待って、反動で二回、使ってしまった。『ヤク中』はあってちゃいけないんだね」「必ず光のあるところに出られると信じて、クスリの欲求と死ぬまで闘って、今日一日を生きていく」。飾らない発言が続く。

このミーティングは薬物の長期使用の影響で、低下した忍耐力などを取り戻すのにも効果的。人の話を聞きながら、自分自身を冷静に振り返ることもできるという。

「死ぬより苦しいかも」というほどの思いをして薬物依存症から回復した人々に、再出発のチャンスを提供できる社会であるかどうか、鋭い問いが逆に社会全体に突きつけられている。

「おじいさん」と呼ばないで

新潟日報二月十か」とつぶやき診察室へと戻られ、以来一〇連載「あ○さん」と名前で呼ばれるようになったのである。年齢より老けて見られていた私だけに不快感を覚え、私もかつて苦々しい思いをしたことが思い浮かんだ。五十七歳のとき地域のある病院で通院治療を受けていた際のことである。担当の看護婦さんはとても親切な人で喜んでいた。が、ある日待

私は、以来いくら高齢者でも特に人前では名前で呼ぶように心掛けた。おじいさん、おばあさんでは、相手を明らかに老